

今年2023年に4年ぶりに海外旅行にスペインへ行くことが出来ました。今までも機会があればホテルよりも簡易キッチン・料理道具・食器付きのアパートメントを利用してきました。食事にいちいち外出する必要もなく、自宅にいる感じの生活ができリラックスできるからです。今回もできるだけキッチン付きの宿を利用しました。

4年前との大きな変化は、対人で色々な手続きができていた事から、インターネットで手続きを自分で行う必要が非常に多くなった事です。まずは、75歳になると旅行保険がネットでは入れないところが出てきます。JTBとAIGが出資しているジェイアイ障害火災保険が後期高齢者でも加入できる旅行保険をネットで受け付けしている事を「ほけんの窓口」で教えともらい加入できました。次は、スペインで使用できる色々なアプリを自分のスマートフォンにインストールする事です。宿の手配のためにBooking.comを、スペイン鉄道の手配にOmioを、コインロッカーの手配にBounceを、タクシーの手配にFREENOWをインストールしました。FREENOWは電話番号が必要なので使いませんでした。地図アプリのGoogleMapにスペインの必要な場所を記憶させました。さらに、スペインでインターネットが使用出来るようにeSIMを携帯電話に入れました。eSIMは電話での通話には対応していません。

10月初旬にスペインに向けて出発しました。ロシアの上空は飛行できないので中国〜カスピ海〜黒海経由の南回りに近い空路でアムステルダムを経てマドリード＝バラハス空港ターミナル2に着きました。依然との違いにまず気が付いたことは、空港ターミナル2の出口に両替店、携帯電話店、その他の店などがないガラーンとした出口です。ユーロの現金があまりないので両替しようとか、空港でsimカードを手に入れようと考えていましたが出来ませんでした。

10時頃空港手荷物受取場でeSIMの携帯電話が繋がったので、Booking.comで予約したマドリードでの宿のチェックイン手続きを30分ほどスマートフォンでしましたが上手くいきません。チェックインは14時から16時なので後回しにして、スーツケースを持ち歩くのは大変なので宿の近くにあるコインロッカーを探しにインフォメーションに行き預かり場所を聞くと、マドリードのアトーチャ通り沿いのコインロッカーを教えてくださいました。ターミナル2からアトーチャ駅まで203番高速バスが15～20分おきにあります。乗り込んで30分ほどでアトーチャ駅に着きました。

駅から歩いて坂道のアトーチャ通りを上り86番地を目指し、15分ほどで無

人コインロッカー到着しました。小さな無人コンロッカーの部屋で入り口はロックされています。日本で携帯に入れたアプリ Bounce で該当する店を探して今日の日付で予約し自分のメールを入力してカードでの支払いをすると、返信メールで外ドアのロック番号と、ロッカー番号が通知されました。入り口のドアを開けて中に入り指定した ML サイズの 50 番を開こうとするが開きません。店内にあるパネルに暗証番号を入れるようですが、どの番号なのか分からず、試行錯誤したが上手くいきません。偶然、次のお客が入って来たので教えて頂き、ようやく預けることが出来ました。ホットしました。既に 11 時頃です。

次は、今日からの宿泊予定のアパートメント方に坂道をゆっくり上りながら街並みを見て歩いて散策しました。気温 30 度を超えているようでとても暑いです。マロリードでの宿の場所を確認して、カフェで再度チェックインの手続きを試みました。自分の分はできたのですが、2 人目の家内の登録をすると途中でストップして続けられない事が続きます。15 時頃まで何度も試みましたが失敗し続けました。電話でアシストを頼もうとしましたが eSIM では電話は使えません。家内の携帯にスペインで利用できる sim カードを調達すべくマドリードの繁華街ソルの近くに店を探し、Vordaphoe の店にたどり着きました。店員に 10 ユーロで 36 日間使用出来る sim カードに入れ替えてもらいました。宿のチェックインを手配している会社のフリーダイヤルに電話して 15 時前によりやくチェックインの為の手続きが出来ました。宿の外との出入り口の暗証番号と、部屋の入り口の暗証番号の両方が、チェックインの時間が来たら自動的にメールで知らされると案内されました。事前のチェックイン時間の案内では 14～16 時の時間幅が記載されていました。待っていましたが暗証番号がなかなか来ないので再度電話して暗証番号の通知メールがきたのは、結局 16 時頃になってようやく届きました。

マドリードの宿泊宿のアパートメントに行き、大きな木の扉横の小さなボックスで暗証番号を入力するとガチャと音がして解錠しました。アパートメントのビルディングの暗証番号は上手くいきました。次に、部屋の入口の暗証番号は初回に 8 桁の数字を入れ最後にレ点のマークを押す必要があるのが分からず手こずりましたが、ようやく部屋に入れてホットしました。野宿か別の宿を取らないといけないかと思う事がありました。ほぼ 1 日を費やして無事に宿の部屋にたどり着くことができホッと一息つくことができました。

バスに乗ったり、露店で少し買い物したり、今まででしたら小銭が必要だった所でもカードが利用でき現金一切不要でした。空港で両替店がなかった理由が分かりました。次回からは、ネットで宿泊を予約してチェックインの手続きが必要なときは日本にいる時にやっておくべきだと思いました。もう一つ、現地でのチェックインの時間は案内に記載されている遅い時間と考えておくべき

だと思いました。もう一つは、10月初めのスペインは夏時間で、今年のマドリードの天気は快晴続きで非常に暑く、湿度は低く午後から温度が上がり35度以上になります。夜明けは8時前で、日没は20時頃です。

このような経験が4年前の中国の浙江工商大学に行った時のもあったことを思い出していました。

2019年の3月に四天王寺大学との交流関係のある浙江工商大学を訪問しました。地理的位置は大阪市と提携がある上海に近い浙江省杭州の銭塘江の河川敷デルタ地帯の再開発によりできた広大なエリアに10校近い大学が集中しており、一つの大学の規模は学生数数万人、全体では20万人規模の学生が学ぶ地域です。近隣のどの大学にも学生寮が林立しています。2～4人が1部屋に入るようです。地震が無いので高層の7～10階建ての大掛かりな建物で、1階は店舗が入り2階以上が寄宿舍です。さらに、海外から有能な教員を集めるために大学がマンションを建て、個人所有となる部屋を廉価で販売して人材確保をしています。学食にあたる食堂棟は2棟あり、それぞれ4階建てで数千人以上の人を収容できる規模で、下の階が学生用で上層階が教職員用です。どこも昼時になると長蛇の列で込み合います。講義用には6階建ての講義棟が約10棟あります。日本では想像もつかない規模の大きさです。

中国では日本のLineに当たるWeChatが良く使用されているようです。スマートフォンが銀行通帳と同じ機能を持ち、且つ財布の役目もして現金を持ち歩く必要がありません。電子マネーを持つには中国で銀行口座を開く必要があります、旅行者では無理です。日本の学生が短期間滞在するときには、中国人の教員からで小銭を分けともらい自分のスマホのWeChatを使って電子マネーとして使います。飲食店や小売店、バス、地下鉄、大運河を走る水上バスの支払いも電子マネーで行います。もちろん小銭の現金も使用できますが、ほとんどの人が電子マネーを利用しています。飲食店ではテーブルにQRコードが貼っており、スマホでQRコードを読み取るとメニューが表示されます。食べたい品物をタップすると代金が表示され、了承すると注文と支払いが同時に行われます。店員さんが注文の品を運んできてあとは食べるだけ、レジは存在せずに終わります。昼食時に学生寮近くのショッピングモールの地下に多数の小規模な飲食店が集合しているところでラーメン様の刀削麺を食べた時、現金しかなかったので現金で支払うと、店主がお釣りを探しに店外に行き、しばらくしてようやく帰ってきました。忙しい時などは現金払いはきっと断られていたと思います。個人旅行するときは非常に不便を感じる電子マネーの社会です。ホテル以外ではクレジットカードは全く使用できませんでした。

その時、中国の電子化の勢いに驚き、日本より進んでいることに気づき、同

時にその便利さも分かりました。帰国してから子供に教えてもらいながらラインや電子マネーを少しずつ使うようになりました。今回も時代の流れについていくのが精いっぱい自分の現状を実感しつつ、スマートフォンをいじりながら何とか無事に帰国できました。



2023年6月17日 洽楽会



今年は学会の話

富 田 修 平

洽楽会の皆さまにおかれましては、お変わりなくお過ごしでしょうか。今年も師走に入りあとわずかとなりました。今年は懸念されていた感染症被害も限られ問題なく新年を迎えることができそうです。しかし緩みなく日々お身体をご自愛されますよう、皆さまのご健康をお祈りいたします。今年の 6 月には 3 年ぶりに洽楽会の懇親会も開催することができ、多くの皆さまにご参加いただき、お互いに旧交を温めることができたことと思います。残念ながら小生は当日体調を崩し参加できませんでしたが来年皆さまにお目にかかることを楽しみにしております。

さて、今年は学会活動も従来の現地開催となり出張の機会が大幅に増えました。一方で、これまでの多くのセミナーがオンラインで開催され、また学外の会議も自身の部屋から参加することが多くなり移動に要する時間と経費も減少しました。ポストコロナの変化として最も良い変化の一つと実感しています。今回の世界的な感染爆発により私たちの生活には様々な変化があったわけですが、私たちはこのパンデミックを、社会を変革する良い機会と捉えてものごとに取り組んできた一面があったと思います。しかし自身を省みると、この 3 年間はただその対応に追われて過ごしてきました。遅れ馳せながら来年こそは自身の変革の年と位置付け、より良い人生にするべく今から備えて参りたいと思います。

今年の日本薬理学会年会は、12 月に神戸で日本臨床薬理学会と合同で開催されます。最近では本学会を含め多くの学会において合同開催の形で開催されます。来年度 2025 年 3 月も日本解剖学会、日本生理学会との合同開催が予定されています。異分野との融合は学術推進にプラスになると考えられるわけですが、薬理学会が自立して今後どのような方向性をもって進むべきか重要な局面と感じています。例年 5 月のこどもの日に総務省から発表される日本の子供の人口では 42 年連続減少で前年より 30 万人減少の報告がありましたが、学術に携わる人口も減り、もちろん薬理学会の会員数も微減しており、日本の学術の将来に危機感を感じております。その一方で、学術分野の細分化と融合により新しい学会は生まれ続けている状況です。私たち研究者は複数の学会を掛け持ちし（若い研究者にとって貴重な発表と新しい交流の場となるケースも多いですが）、時間を費やします。会員各々が参加する諸学会と薬理学会への取り組む姿勢を再考する必要があるのかも知れないとも感じています。薬理学会へのコミットを強め、学会員同士の交流をさらに密にして関連する諸学会会員も薬理学会に巻き込んで、薬理学会を交流の中心にもってくるといえるのはどうだろうか。固い話となりましたが、最近思うことを書かせていただきました。

皆さまにおかれましてはよいお年をお迎えくださるようお祈り申し上げます。

退職のご挨拶

徳留 健太郎

2019 年 4 月より大阪大学大学院医学系研究科分子・細胞薬理学より異動してから任期の 5 年を迎えることとなりました。この 5 年間を振り返りながら原稿を執筆しているのですが、時が経つのは年々あっという間だなと実感しております。

私は冨田修平教授の元で、低酸素に起因する精神発達障害の発症に関する研究に従事することとなりました。元々大学院博士課程でモデル動物を用いたてんかん研究に従事していた経験から、その経験を活かせばなんとかなると楽観的に考えて、低酸素モデル動物の作成やその評価を始めました。何もないところから立ち上げだったため、自分が考えたことが本当に正しいのか、また、ちゃんと自分の考えや研究について理解してくれたのだろうかなど不安を抱えながら、こうでもないああでもないで試行錯誤が続く日々だったように思えます。そういうのも含めて研究って面白いと思う時期もありました。しかしその一方で、自分が未熟であるが故に実験結果がうまく出せずに我慢が必要な時期が半年以上続いたこともあり、辛い時期も沢山経験しました。今振り返ると、私の冨田研で過ごした 5 年間は決して順風満帆とは言えませんでした。どれも貴重な経験だったと感じております。この場をお借りして、こんな私を支えてくださった先生方にお礼させていただきたいと思います。

そんな私も、研究活動を通じて、将来的に自分がどういう研究に従事したいのか考えるようになり、現在は臆ながらもその方向性が見えてきたように思います。もちろん、それは現在所属する薬理学教室でも可能ではあるのですが、ちょうど任期最終年度を迎える前あたりから、新しい場所で心機一転新しい挑戦をしてみたいなと考えるようになりました。私一人がいなくなったところで薬理学教室にはなんの影響もないと思いますが、より良い研究室であり続けることを陰ながらお祈り申し上げます。そして、今後とも私だけでなく、薬理学教室を何卒よろしくお願い致します。残り短い時間ですが、現在取り組んでいる研究プロジェクトを一度まとめるべく追い込みをしている最中でございます。そして、最後には笑顔で薬理学教室での仕事を終えることができるよう、今この瞬間を大事に過ごしていけたらなと思います。

最後に余談ですが、仲良くしてくださった先生方との飲み会、今でも私の大切な大阪市大（公立大）の思い出です。

敬具

薬理にお世話になって35年

山中 伸弥

皆様、ご無沙汰しております。冷楽会会誌で執筆の機会を頂きとても嬉しく思います。

私が薬理学教室の門戸を叩いたのは35年前のことです。整形外科の先輩である大久保先生から基礎医学の研究をしたいのなら薬理が良いと奨めて頂いたのがきっかけです。教授の山本先生はご退官まで3年だったのですが快く受け入れて頂きました。ただ院入試に合格する必要がある、神戸大での学生時代、薬理学の授業も実習もさぼり倒した私は一抹の不安がありました。予想は的中し、池本先生の口頭試問ではしどろもどろになりました。「薬理のことはわかっていませんが、研究をしたいんです！」と叫び、何とか合格させて頂きました。

1989年の4月に入学し三浦先生にご指導を頂くことになりました。最初の3か月くらいは何でも良いから論文を読むようにと言われました。その時に読んだ論文の一つが柳沢正史先生のエンドセリン発見で、「歳もあまり変わらない人がこんなすごい仕事を大学院でしたんだ」と衝撃を受けました。夏ごろに初めて実験をさせて頂きました。血小板活性化因子（PAF）の降圧作用には、ソロンボキサン A2 が関与するという仮説を検証するための実験で、犬に予めソロンボキサン A2 合成阻害薬を投与すれば PAF の降圧は抑制されるという予想でした。しかし実際には降圧は逆に大幅に増強されたのです。この予想外の結果に、私は自分でもびっくりするくらいに興奮しました。すぐに三浦先生に報告すると、先生も一緒に同じくらい興奮されました。この出来事が私の研究者としての原動力になっています。予想外の結果の謎解きが私の学位論文となりました。その後4年弱の留学を終え、再び市大薬理で研究させて頂きました。山本先生の後を継がれた岩尾教授からは、授業や実習で薬理をしてくれたら、研究は自由にして良いと言って頂きました。そのお言葉に甘え、留学中に見つけた NAT1（eIF4G2）という遺伝子の研究を続けました。タンパク質の翻訳に関わると考えられる遺伝子ですが、ノックアウトマウスは発生初期に死んでしまいました。そこで初期胚から樹立される胚性幹（ES）細胞で NAT1 の機能を調べ、分化能に必須であることを見つけました。この研究がその後の iPS 細胞の開発につながりました。

時が過ぎ、大学院時代に誕生した二人の娘は成長し、二人の孫が誕生しました。2022年には12年間務めた iPS 細胞研究所の所長を退き、再び自身の研究に注力しています。研究テーマは NAT1 遺伝子です。活動場所の中心はサンフランシスコで、毎月の日米往復を続けています。ES 細胞だけでなく、様々な幹細胞や分化細胞でも重要であることが分かりつつあります。

研究に加えて、2020年に発足した公益財団法人京都大学 iPS 細胞研究財団の理事長も務めています。これは最適の iPS 細胞を良心的な価格で企業に提供することを使命とする組織で、100 名ほどの職員が活動しています。2024 年からは京都に加えて大阪中之島でも活動する予定です。

2023 年 11 月には Victor Dzau 博士からのお誘いでシンガポールに行ってきました。全米医学アカデミー会長である Dzau 先生は山本先生、池本先生のご友人で、私が院生の時に何度も薬理に来られていました。「シンヤはあの頃は学生だった」と、とても懐かしがられていました。

自らの 35 年にわたる研究生生活を振り返り、市大薬理でスタートできたことは本当に幸運でした。山本先生、池本先生、雪村先生、三浦先生、光山先生をはじめ、大変にお世話になりました皆様にこの場をお借りして心から御礼を申し上げます。大学は市大から公大へと変わりましたが、薬理学教室および沿楽会の皆様の益々のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

趣味・のようなもの

中村 嘉宏

1997 年から 2001 年まで薬理学教室でお世話になった中村嘉宏と申します。

現在は不妊治療専門のクリニックを江坂で開業しております。

私はもともと産婦人科学教室大学院の所属で、薬理学教室の所属ではありません。岩尾先生、三浦先生のご厚意で薬理学教室に通わせていただき、山中先生に実験指導していただいて学位を取得することができました。本当に感謝してもしきれません。10 月半ばに沿楽会秘書の方から原稿の依頼があったとき、そのご恩に報いようと二つ返事でお引き受けいたしました。しかし、原稿を書く段になって「書くことがないこと」にはたっと気が付きました。

秘書の方には「気楽に趣味のことなどを書いてください。」とメールで励ましていただきましたが。

私には趣味はありません。55 歳になった現在も仕事が終われば、酒を飲み、寝落ちするという基本的に酔生夢死の人生を送っております。酔狂の至りで、「ワインエキスパート」の資格をとり、ソムリエ協会にも入会しました。ドクターには、ワイン好きの先生も多く、よくワインの蘊蓄などで「マウンティン

グ」されていたので、「マウンティングし返したい」と思い資格を取得したのですが。しかしながら、資格取得後に赤ワインが苦手なことに気が付きました。フルボディのボルドーなどを飲んだ翌日は、鼻先ににおいが残っているような感じが続きしんどくてたまりません。ローヌのシラーなどは単なる拷問です。すっかりワインを飲まなくなりました。もっともワインのようなスノビッシュな趣味は向いてないのでしょう。みもふたもないのですが、酔ってしまえばなにを飲んでも一緒ですし。

資格といえば、試験を受ける時の緊張感が割と好きなので、いくつか資格を持っております。アロマ検定1級、小型船舶操縦士1級、英検1級、PADI アドバンスド・オープンウォーターダイバーを取得しました。英検1級以外は履歴書に書いてもあまり意味がない資格です。

小型船舶操縦士は「将来の税金対策のためにいつかクルーザーを買う」という気宇壮大な夢をもって取得しました。しかしながら、人生とは残酷なものです。税金対策をする前に、「税務調査」に入られました。4年ほど前です。まことをもって忌々しい限りです。税務調査官には、「書籍購入費が高すぎませんか？」との指摘をうけました。「仕事以外の趣味の本も買っているのではないですか」と追及してきます。早速反論し、「いや仕事以外の本は買ってないですよ。第一僕読書嫌いですし。」と答えたら、調査官の眼が眼鏡の奥で妖しく光りました。「クリニックのホームページを拝見しましたが、読書と茶道（庸軒流）が趣味と書いてありますよね。」と返してくるのです。確かにホームページの「医師紹介」にそう書いております。再度反論し、「僕にとって読書というのはドストエフスキーやら夏目漱石といった格調の高い文学を読むことをいいます。そんなものは学生時代以来読んでないです。私の買っている本は医学書、ビジネス書、経営関係の本だけです。」と抗弁しましたが、しっかりと「手土産」をお渡しすることになりました。

さて、ホームページに書いていた、もう一つの趣味？の茶道は40歳を過ぎた時、ボクシングと一緒に習い始めました。我ながら両極端なように思います。単純に当時住んでいた家から徒歩圏内にボクシングジムと茶道のお家元の家があったので習い始めたまでです。

まず、ボクシングジムは「がち」のボクシングジムでした。プロの方、あるいはプロ志望の人がほとんどでした。週3回ほど通っておりました。そして、多少コンビネーションを覚えたころ、当時勤めていた病院で研修医の先生と「ミット打ち」をしていました。「こら、そこがら空きや。ガード上げて」などといったばしのことをいいながらミット打ちをしておりました。なんのことはない、ジムで私がやられていることを研修医の先生に「指導」していただけなのです。やがてジムでスパーリングが始まると怖くてやめてしまいました。プロを相手

にスパーリングするのですが「本気にならんといってくださいね。思わずこっちも本気なるときありますから。」といわれるわけです。そしてジムの会長からは「ちゃんとパンチ見といってくださいね。ちゃんとみていると動体視力がついて避けられるようになります。」とアドバイスをいただきました。ありがたいですが、顔面に飛んでくるプロのパンチなんて怖くて見ることはできません。恐怖で生まれて初めて過呼吸になりかけて、これはやばいと思いやめてしまいました。ただでさえヘッドギアをして、マウスピースも噛んでいるので呼吸しにくい状態ですし。

そして、茶道の方ですが、同級生の外科の先生の叔母様が「お家元」でしたので、その先生(ちなみに女医さんです。)と一緒にはじめました。よく「茶道をしている。」というと「流派は何ですか?」と聞かれます。「庸軒流」という流派であり、そんなに有名ではないのでお答えするのに非常に苦労いたします。

「千利休の孫、千宗旦の4大高弟の一人、藤村庸軒が打ち立てた流派です。表千家や裏千家と似通っておりますが、小堀遠州のような武家茶道の要素も少し入っている流派です。」と答えなくてははいけません。落語の「寿限無」のような感じです。それはともかく、お稽古は隔週で通っておりました。お家元の家でのお稽古でしたので、本格的な茶室もあり、茶碗、茶杓、棗などの茶道具や掛け軸なども大変貴重な「名物」が揃っていました。なかなか得難い恵まれた環境でした。しかしながら、仕事のため抜けることも多く、なかなか上達しませんでした。かれこれ、10年ほど通い、薄茶点前、炭点前がなんとかできるようになった程度です。お家元も不憫に思われたのか、お免状くださいました。うれしいと同時に「本当にいいんですか?」といった気持ちになりました。3年前からコロナ禍のためお稽古が中断しておりましたが、また再開されたので時間ができれば参加したいとおもっております。

このようにいろいろなことに手を出してきた私ですが、結局、何一つものになっておりません。でもそれも私らしくていいような気がします。趣味などなくても生きていけますし、無理につくるものでもないでしょう。思いついたら始めて、飽きればやめればいいのではないのでしょうか? なによりも一卵性双生児の息子二人はまだ7歳ですので、趣味とか悠長なことを言っている場合ではなく、まだまだ20年ほど働かなくてはなりません。また、明日からも同じような仕事の日々が続くのでしょう。

薬理学教室での思い出、近況報告

大阪市立総合医療センター 泌尿器科 腎移植・透析部
浅井利大

私は現在大阪市立総合医療センター 腎センター泌尿器科 副部長、腎移植・透析部 部長として勤務しております。薬理学教室を卒業してからもう 21 年になりますが、この度洽楽会誌に拙文を掲載いただけるとご連絡いただきました。誠に有り難うございます。ご存じない方が沢山いらっしゃると思いますので、これまでの自身の歩みを、薬理学教室での思い出を中心にご紹介いたします。

1996 年、平成 8 年に千葉大学を卒業し、大阪市大泌尿器科学教室に入局しました。市大泌尿器科を選んだのは、大学時代に上田志朗先生（後に薬学部教授にご就任）のレニンアンギオテンシン系の講義を受け、腎臓に興味を持ったこと、外科系に進みたいと考えていたこと、母校では第 2 外科が腎移植を行っていましたが、市大では泌尿器科がしているところに魅力を感じたことが理由でした。入局と同時に大阪市立総合医療センター泌尿器科での臨床研修を開始しました。2 年間の研修を終了した後に、上司の杉本俊門先生から「三浦先生のお世話になるのがいいやろ」と言われ、薬理学教室の大学院に入学し、三浦克之先生の下で研究生生活に入ることとなりました。泌尿器科の内田潤次教授もその頃三浦先生の指導を受けられていたことから、色々とお話を伺っており、お会いする前から期待に胸を膨らませておりました。初めてお会いした際には、三浦先生と同学年で長い付き合いのある杉本先生と仲谷達也前教授もご一緒下さり、普段通りの柔和な笑顔で対応して下さいました。大学院入試の後、16 階の教室にお邪魔し、そこで同期の谷口勝先生、難波雅司先生と初めて顔合わせをしました。三浦先生とは対照的に、怖い顔をした岩尾先生からいきなり「お前ら今からテストすんぞ！」と言われ、噂通りだなと縮み上がったことを良く覚えております。

研究生生活に入ってから、それまでの臨床生活とはがらりと環境が変わり、動物実験や検体の取り扱い、実験手技のみならず、これまで系統的に学んでこなかった統計学や、英語論文執筆と様々なことを学習する機会があり、医師としてまた科学者として進歩していくことを日々感じられる、本当に有意義な毎日を過ごすことができました。毎週の抄読会も自分が担当の時はプレッシャーでしたが、その時に得られた分子生物学の基本的な知識は現在まで非常に役立っております。かと言って真面目に研究ばかりやっていた訳では無く、教室旅行や宴会、学会出張先などで皆とワイワイ楽しんだこと、初めて国際学会に出席し、学位論文に向けて読み込んでいた論文の author と質疑応答できたことや、

空き時間の観光を楽しんだこと等も懐かしく思い出されます。昔は今ほど世の中が喫煙に厳しくなかったこともあり、(ヘビー) スモーカーの三浦先生の部屋は喫煙室となっていました。山中伸弥先生もその部屋を使われておりましたが、今振り返るとよく我慢されていたな、と思います。山中先生が奈良先端科学技術大学院大学に異動された後はそのデスクを使わせていただいたのですが、iMac（当時最先端だった、カラフルな Mac のデスクトップモデル）の背面の半透明部分が、大学院卒業の頃には茶色くなっていました。私の研究テーマは免疫抑制薬シクロスポリンによる腎尿細管間質障害の機序を検討するもので、線維化に先立って炎症細胞の浸潤が起こっていることを示し、Transplantation に accept され、少し足踏みしてしまいましたが、無事に大学院を卒業することができました。卒業後、私立の病院勤務となり、毎週水曜日が研修日であったため、引き続きもう 1 年、三浦先生にお世話になりました。

その後、現在の勤務先である大阪市立総合医療センターに転勤し、現在に至ります。当院には、治療会会員では糖尿病内科部長の細井雅之先生、血液内科部長の中尾隆文先生がいらっしゃる、普段からお世話になっております。泌尿器科の中でも腎移植をはじめとする腎不全外科を専門に扱っており、同じく三浦先生の教え子である西出峻治先生らとともに慢性腎臓病患者さん個々に応じた適切な腎代替療法を提供すべく、Shared decision making (SDM) を念頭に、腎臓・高血圧内科の先生方と協力して診療に当たっております。公立大学泌尿器科と比較すると腎移植の件数は年間 20 例前後と少ないですが、腎臓・高血圧内科や糖尿病内科から移植目的でご紹介いただくことが多く、最近では透析を経ずに移植を行う先行的腎移植 (Preemptive Kidney Transplantation: PEKT) の症例も増加傾向です。また、慢性腎臓病患者さんにおいても今後一層高齢化が進むと予想されますが、高齢者の在宅医療として腹膜透析が注目されております。当院の腹膜透析の導入件数は、大阪府下 1 位を維持しており、合併症予防や患者さんをアシストするための地域連携強化にも取り組んでおります。

プライベートでは 2015 年のラグビーワールドカップでの日本の躍進に影響され、身体を鈍らせていてはいけないと思い、ランニングを始めました。今ではすっかりハマってしまい、フルマラソンで目標としていた山中先生のベスト 3 時間 22 分を上回り、3 時間 16 分の記録を出すことができました。あわよくば 2-3 年のうちにサブスリー (3 時間以内) を達成できないかと夢見ています。2 年前の大阪ハーフマラソンではコース上で山中先生とお会いし、ご挨拶できました。色々と気の赴くまま書き散らかしてきましたが、私と同時期に薬理学教室に入りにされていた治療会会員の方々が拙文をお読み下さり、懐かしいなと楽しんでいただけると嬉しいです。皆様がよいお年を迎えられることを祈念しております。

玉田 聡

2001 年から 2003 年まで薬理学教室および薬効安全性学教室でお世話になりました玉田聡です。私は現在、堺市にあるベルランド総合病院に勤めています。専門は泌尿器科腫瘍で、日々泌尿器科癌の診療にあたっています。泌尿器科癌は一般的にはなじみが薄い癌ですが、手術療法、薬物療法どちらも新しいことが次々に導入される領域です。腹腔鏡手術もかなり初期より積極的に導入され、最近では泌尿器領域のがんの手術はほぼすべてがロボット手術で行われるようになりました。当院には手術用ロボットは 2 台あり、泌尿器科だけで 100 例のロボット手術を行っています。

手術療法だけでなく薬物療法もかなり進化してきました。免疫チェックポイント阻害剤を用いる治療も悪性黒色腫に次いで承認され、腎癌、尿路上皮癌の治療には欠かせない存在となっています。ただ、免疫チェックポイント阻害剤のみで治療が成功するわけではなく、多くは分子標的薬や抗がん剤などが同時に投与されています。

その分子標的薬の進歩も目覚ましく、泌尿器科領域では 2008 年より使用されています。分子標的薬のメカニズムを理解するには、シグナル伝達や増殖因子に関する理解が欠かせません。私は三浦先生のご指導の下、浅井先生の腎間質線維化の発症メカニズムについての先行研究を引き継いで勉強、研究させていただきました。その過程でシグナル伝達や増殖因子に関連する多くの基礎知識を得ることができました。当時はその知識が臨床に活用できることは想像もしていなかったのですが、今となってはその知識なしに泌尿器癌の薬物療法を語ることは不可能なぐらい、多くの薬剤が臨床応用されていることに驚きを隠せません。大学院に進む臨床医も年々減少していますし、必要な過程ではないのかもしれませんが、少なくとも今の私には物事の考え方を学ぶいい機会であったと痛感しています。あと 15 年もすれば先進医療の第一線から退く時が来ると思いますが、それまでできるだけのことを後進に伝えていこうと思っていますし、引退後に備えて趣味であるゴルフにも力を注いでおこうと思っています。

第 30 回市大フォーラム

2023 年 8 月 17 日（木）大阪公立大学医学部学舎におきまして、市大フォーラムを開催いたしました。皆さまのお陰様を持ちまして、御出席者 29 名、発表演題 9 題の盛会となりました。酷暑のなか御参加いただきました先生方に御礼申し上げます。

プログラム（敬称略）

（1 題 20 分：発表 12 分・質疑応答 8 分）（敬称略）

13:00-13:05 開会宣言

座長：船本 雅文（徳島大学大学院医歯薬学研究部 医学域 医科学部門生理系 薬理学分野）

1. 13:05-13:25 徳島大学大学院医歯薬学研究部 医学域 医科学部門生理系 薬理学分野

小林 雄一

「病的心肥大におけるエピジェネティックな転写制御機構の解明」

2. 13:25-13:45 関西医科大学医学部医学科 iPS・幹細胞再生医学講座

金川 竜也

「膠様滴状角膜ジストロフィ患者由来 iPS 細胞を用いた病態再現モデルの確立
～治療法の開発を目指して～」

座長：松永 慎司（大阪公立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学）

3. 13:45-14:05 鳥取大学医学部薬理学・薬物療法学

市原 克則

「オハイオ州シンシナティ小児病院への留学の報告」

4. 14:05-14:25 三重大学大学院医学系研究科 統合薬理学

弓削 瑞葵

「ゼブラフィッシュを用いた新たな発達神経毒性評価系の開発」

座長：合田 光寛（徳島大学大学院医歯薬学研究部 臨床薬理学分野）

5. 14:25-14:45 徳島大学大学院医歯薬学研究部 臨床薬理学分野（徳島大学病院薬剤部）

相澤 風花

「抗がん剤誘発性末梢神経障害に対する HMG-CoA 還元酵素阻害剤の多面的作用」

6. 14:45-15:05 大阪医科薬科大学 病態分子薬理学研究室
中川 恵輔
「虚血性急性腎障害に対する sGC 刺激薬の影響」

15:05-15:30 BREAK

座長：本間 拓二郎（大阪公立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学）

7. 15:30-15:50 徳島大学大学院医歯薬学研究部 薬学域 医薬品機能生化学分野
今西 正樹
「低酸素誘導性膵がん悪性化因子の網羅的探索と低酸素がん微小環境における膵がん化学療法抵抗性発現メカニズムの検討」

8. 15:50-16:10 大阪公立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学
徳留 健太郎
「ラット大脳皮質内微小構造における妊娠期低酸素曝露の影響」

16:10- 閉会宣言

2023 年 論文業績

1. Kihira Y, Fujimura Y, Tomita S, Sato E: Signaling pathways upregulating glutathione-specific γ -glutamylcyclotransferase 1 by 3-(5'-hydroxymethyl-2'-furyl)-1-benzylindazole. *Mol Med Rep.* 28:216 (2023). doi: 10.3892/mmr.2023.13103.
2. Generation of Rat Monoclonal Antibody for Human Nucleolin. Yuki Nishino, Takujiro Homma, Kan-Ichiro Ihara, Junichi Fujii, Taro Tachibana, Chikako Yokoyama. *Monoclon Antib Immunodiagn Immunother.* 2023, 42, 145-149. doi: 10.1089/mab.2023.0008.
3. Copper chelation by d-penicillamine alleviates melanocyte death induced by rhododendrol without inhibiting tyrosinase. Kei Nagatani, Yuko Abe, Takujiro Homma, Junichi Fujii, Tamio Suzuki. *Biochem Biophys Res Commun.* 2023, 30, 71-77. doi: 10.1016/j.bbrc.2023.04.062.
4. Imbalance of glutamatergic and GABAergic neurotransmission in audiogenic seizure-susceptible leucine-rich glioma-inactivated 1 (Lgi1)-mutant rats Masato Kinboshi, Saki Shimizu, Kentaro Tokudome, Tomoji Mashimo, Tadao Serikawa, Hidefumi Ito, Ryosuke Takahashi, Akio Ikeda, Yukihiro Ohno, *heliyon.*2023 9(7):e17984
5. 富田修平, 松永慎司, 山口雄大『薬理学授業における水平・垂直的理解の工夫と試み—階層別学習目標の設定と ClinicalKey Student Japan (CKSJ)の活用—』、日薬理誌 158:444-447 (2023). <https://doi.org/10.1254/fpj.23044>

2023 年 学会・研究会発表

第 143 回日本薬理学会近畿部会 2023 年 6 月 24 日

マクロファージの低酸素誘導因子発現が腫瘍組織環境へ与える影響についての検討
平川 遼、松永 慎司、徳留 健太郎、本間 拓二郎、富田 修平

第 19 回世界基礎・臨床薬理学会議 2023 2023 年 7 月 3-7 日

19th World Congress of Basic & Clinical Pharmacology (WCP2023)

The Prolyl-hydroxylase Inhibitor Alters Tumor-Infiltrating Macrophage Phenotype via the PHD-HIF Axis and Inhibits Tumor Growth in a Mouse Model. Matsunaga S, Hirakawa R, Nishide S, Kabei K, Tokudome K, Homma T, Uchida J, Tomita S.

第 47 回日本鉄バイオサイエンス学会学術集会 2023 年 9 月 2-3 日

HIF-PH 阻害薬の悪性腫瘍への潜在的影響

富田修平

低酸素研究会 2023 2023 年 9 月 9 日

腫瘍関連マクロファージにおける低酸素誘導因子発現上昇が腫瘍に与える影響

松永慎司、本間 拓二郎、平川 遼、徳留 健太郎、富田 修平

アメリカ腎臓学会 2023 (ASN Kidney Week 2023) 2023 年 11 月 2-5 日

Hypoxia-inducible factor-1alpha induces apoptosis of tubular cells in renal ischemia-reperfusion injury via regulating glutathione-specific gamma-glutamylcyclotransferase.

Yoshitaka Kihira, Takujiro Homma, Yoshino Fujimura, Shinji Matsunaga, Eiji Sato, Shuhe Tomita

第 14 回スクリーニング学研究会 2023 年 11 月 30 日

フェロトシスから細胞を保護する新規化合物のスクリーニング

本間 拓二郎、川尻 柊斗、廣谷 碧美、松永 慎司、富田 修平

西日本医学生学術フォーラム 2023 2023 年 12 月 2 日

マクロファージの低酸素誘導因子発現が腫瘍組織環境へ与える影響についての検討

平川遼、松永慎司、本間 拓二郎、富田 修平

第 97 回日本薬理学会年会 2023 年 12 月 14-16 日

マクロファージの低酸素誘導因子が腫瘍進展に与える影響の検討

松永慎司、平川 遼、本間 拓二郎、徳留 健太郎、富田 修平

紅参抽出物は細胞内エネルギー代謝を調節することで栄養欠乏時の細胞死から保護する

本間 拓二郎、松永慎司、徳留健太郎、寒川訓明、寒川慶一、富田修平

The analysis of cortical microstructure in maternal hypoxia rat model.

Kentaro Tokudome, Masaaki Ueki, Takujiro Homma, Shinji Matsunaga, Yukihiro Ohno, Shuhe Tomita

2023 年今年の出来事

3 月 大学院生の寒川訓明さんが博士課程を修了されました。社会人として充実した毎日を過ごされることをお祈りしています。

6 月 冷楽会をホテルモントレグラスミア大阪で開催しました。久々の開催でしたが、いつもの通り和やかで楽しい会となりました。ご参加いただいた皆様どうもありがとうございました。



8月 第30回市大フォーラムを11教室参加のもと開催いたしました。
酷暑のなか、ご参加いただきました先生方に感謝申し上げます。



12月 超願寺にて動物慰霊祭を行いました。毎年大変お世話になっております。



大学統合に伴い、ホームページも新しくなりました。
今後も内容の充実を図ってまいりますので、アドバイスをいただければ幸甚で
ございます。

URL : <https://cms-admin.omu.ac.jp/med/dept-pharmacology/>

洽楽会のページに入るパスワードは下記の通りです。

ユーザーID : gr-med-yakuri@omu.ac.jp

パスワード : yakuri-omu1949

※ご意見、ご感想、ご連絡先の変更等がございましたら、下記連絡先まで
お知らせくださいませ。

MAIL: gr-med-yakuri@omu.ac.jp

編集後記

早いもので、私が会誌を作成するのは今年で6回目となります。
もうかれこれ6年近くここで世話になっているんだなあとしみじみ感慨深い
思いでいっぱいです。

さて、会誌作成中の現在、修業実習の真っ只中であります。20歳のピチピチな
学生たちに元気を分けてもらいながら、そろそろ作成の仕上げに取り掛かって
まいります！

今回もご協力いただきました先生方のお陰様で、会誌を無事発行する事が出
来ました。この場をお借りして御礼申し上げます。

皆様が良いお年を迎えることができますよう、心からお祈り申し上げます。

分子病態薬理学教室 秘書 都 志由架